日本学術会議だより　№5

地域型研究機関設立（勧告）・学術予算の増額（要望）出される

昭和62年5月　日本学術会議広報委員会

日本学術会議は，去る4月22日から24日まで第102回総会（第13期の5回目の総会）を開催しました。今回の「日本学術会議だより」では，今総会で採択された勧告，要望等を中心として，同総会の議事内容をお知らせします。

総会報告

総会ではその第1日目に，会長からの経過報告，各委員会報告に続き，規則などの改正，勧告・要望等の6つの提案がなされ，同日の午前中に提案1件が，午後に各部会で審議した上，第2日目の午前中に3件が，第3日目の午前中に1件の採決が行われた。なお，総会前日の21日午前に連合部会が開催され，これらの案件の予備的な説明，質疑が行われ，第2日目の午後には，「21世紀へ向けてのエネルギー問題」についての自由討議が，第3日目の午後にはそれぞれの常置委員会，特別委員会が開催された。

また総会の冒頭に，先に逝去された北川晴雄会員（第7部副部長）を追悼して黙禱を捧げた後，新たに任命された鶴藤丞会員が紹介された。

第1日目の午前中にまず現代の「高度技術化社会」における人間の役割と対応及び「こころ」の健康の回復，増進の問題について総合的に検討するために「マン・システム・インターフェース（人間と高度技術化社会）特別委員会」を設置することが決定された。今期は余すところ約1年間であり，この特別委員会は各部から委員を選出して直ちに活動を開始した。第2日目の午前には，まず，第1常置委員会等で検討されてきた「日本学術会議の運営の細則に関する内規」の一部改正が採択された。改正の第一は，従来の地方区会議の名称を地区会議とし，広報委員会がこれを組織することとしたことであり，第二は日本学術会議が勧告等を出すに当たって整合性を考慮すべき過去に行った勧告等を3期前から後のものに限ることにしたことである。次に第6常置委員会が検討してきた日本学術会議の行う国際学術交流事業の実施に関する内規の改正が採択された。これは，今まで国際学術交流事業については，「団体加入」，「代表派遣」，「国際会議主催・後援」，及び「二国間学術交流」の基準があったが，これらを一つの内規にまとめたものであり，本会議の行う国際学術交流事業の見直しを今後行い，必要な自己改革を図る原則を定め，予算，組織等の基盤の拡充・強化に努めて，国際社会への学術的貢献を一層拡大してゆこうとする方針を確立したものである。

さらに本総会では，「地域型研究機関（仮称）の設立について」（勧告）と，「大学等における学術予算の増額について」（要望）の提案が，いずれも活発な質疑応答の後，賛成多数で採択され，直ちに内閣総理大臣始め関係諸機関等に送付された。（これらの詳細は別項所載のとおりである。）

また本総会では「医療技術と人間の生命特別委員会」の中間報告－いわゆる脳死に関する見解－を対外発表することに関する提案が行われた。これは同特別委員会が60年10月から審議を重ねてきたものであって，基本的には脳死を個体死とすべきであるとの主旨であった。日本学術会議の内規によれば，各委員会等の報告を外部に発表するには総会または運営審議会の承認を必要とすることになっており，この件は対外発表の可否を問うものとして総会に提案されたのであった。しかし，ことの重要性にかんがみ慎重論，時期尚早論の空気が強く，対外発表の可否を問う提案としては取り下げられ，総会でこの問題を討論することとなり，第2・3日目の両日にわたり活発な討論が行われた。

「地域型研究機関の設立について（勧告）」

我が国の基礎的学術研究の水準を一層高めるためには，各地域の研究を高度化し，地域の特色に基づく活発な国際対応を可能にする条件を整備しなければならない。

そのためには，地域の大学や研究機関を活性化するとともに，地域の研究者並びに社会の要請に即した課題について総合的なプロジェクトを実施し得る基盤を整備する必要である。

これを達成するためには，要所に地域型研究機関（「地域センター」という。）を置く必要がある。この地域センターは，地域の特性を活かした研究やその地域に深く関連する研究の拠点としての機能とともに，既存の研究機関及び研究領域の枠を越えて研究者の交流を促進する機能をもったものである。従って地域センターには，相互に利用し得る研究機器や研究資料を備える必要がある。

地域センターの規模・内容は，各地域の研究者の自主的・具体的要請によって異なるが，次のいずれかまたはこれ等を組み合わせた形態をもつ。

A　地域研究（area studies）を主とするもの
B　大型共同利用機器を備えるもの
C　中小型の研究機器及びその他の研究設備を備えるもの

なお，設置形態は，国公私立大学等の研究者が，平等に利用し得る国立の共同利用機関とし，官公庁，産業界にも自由に開かれたものを目指す。

大学等における学術予算の増額について(要望)

「国が栄える時，そこには立派な大学がある」といわれる。大学において優れた人材が養成され，独創的かつ自主的な研究活動を通して学術が振興し，高い文化が形作られ新しい技術が生まれる。大学は，国際的にも学術交流の場として，広く世界の協調と平和のために基本的に重要な役割を果たしている。

しかし，現在，我が国における大学を中心とする学術研究の財政的基盤は極めて憂慮すべき事態におかれている。これは一つには国の財政事情によって，現行の概算要求の枠組みが強い制約になっているからであり，時代の進歩に即応した学術予算を組むことが非常に困難な情勢になっていて，しかも，このひずみは年毎に増幅されつつある。

文化国家としての実を挙げ，学術の振興を図るためには，まず，大学等における学術予算をこの際思いきって増強することが絶対に必要である。そのためには学術予算を組む上において，一般の予算要求のシーリングの別枠として，当面5年間の増額計画を策定する措置をとるよう強く要望する。なお，科学研究費補助金及び日本学術振興会の事業予算について，毎年少なくとも15%増加させ，5年間で倍増し，国公私立の大学への国費の支出についても，格段の増額を図るよう考慮されたい。

自由討議－21世紀へ向けてのエネルギー問題－

この自由討議は，今期設置された「資源・エネルギーと文化・経済・環境特別委員会（エネ特)」のメンバーが主となり，個人の立場で，来るべき21世紀へ向けてのエネルギー問題の展望と課題について意見を発表したものである。会長近藤次郎（エネルギー問題の基調講演)，第5部，エネ特委員長上之園親佐（エネルギー問題の研究動向と将来)，第5部垣花秀武（原子力の安全性，廃棄物処理並びに核拡散問題についての研究動向)，第3部，エネ特委員則武保夫（経済の立場からみた資源＜特に石油＞問題）の各会員がそれぞれ付記したサブテーマについて問題を提起した。これに続いて，第4部，エネ特委員澤田龍吉（環境問題に関連して)，第5部，エネ特委員山口梅太郎（資源問題に関連して)，第7部，エネ特委員梅垣洋一郎（健康問題に関連して)，第2部，エネ特委員小山　昇（社会問題に関連して)，第4部大島康行（グローバル・チェンジ・プログラム（ICSU)）の各会員からコメントが提出された。さらに，出席会員のうち第2部及川　伸会員，第7部曲直部壽夫会員，第5部山口梅太郎会員，第4部西川　治会員，第2部関　寛治会員からコメントが提出された。

エネルギー問題は広い分野に関連しているが，文化とエネルギーについてのコメントが得られなかったのは惜しいことであった。この度の提起・提出された対象・論旨は多様であったが，あえて要約すると以下のようである。

人間は有史以来，指数関数的に人口が増加し，消費エネルギーも増大した。その結果放射能や大気汚染からの障害が問題となってきた。これら障害を絶無とすることは極めて重要である。熱エネルギーから電気エネルギーへの有効変換効率を高めて省エネルギー化をはかること，核燃料サイクルによって核燃料を有効に使用し，かつ廃棄物処理に関する研究は重要であること，石油資源は，現在すぐになくなることはないが，地下探査法と掘削技術を開発して資源評価を高めることが強調された。

社会福祉におけるケアワーカー(介護職員)の専門性と資格制度について(意見)

社会福祉・社会保障研究連絡委員会では，従来，我が国では全く問題とされていなかったケアワーカーの問題について，2月25日厚生大臣に表記の意見書を提出した。

意見書の中身の主要な点は，後期高齢者の増加に伴い，“重介護”を要するものが増えてきていることに対し，その介護を受けるものの人間としての尊厳に立った介護を担うケアワーカー（寮母職，家庭奉仕員及び家事援助者などのホーム・ヘルパーに類する職種の担い手）の専門性を明らかにし，その専門性に基づく資格制度を造ることによって質を高め，さらに量的拡大を図る必要がある。資格は，高校卒業後，最低6か月の実習を含んだ2年間の採用前訓練を条件とし，またその職務にふさわしい待遇を確立することなどである。

いずれも既に高齢化の進んでいる国々，例えばイギリス，西ドイツ，スウェーデンなどでは実現していることであり，今後，日本の高齢化社会の急速な進展を考えるとき，当然のことといえよう。

ことに，高齢時におけるケアワーカーの問題はその需要の広がりへのたんなる対応以上に大切である。それは，いわゆる“重介護”を要する高齢時において，その介護の在り方が，誰でもできるというものではないということである。その人の心身にあう介護を，直接身体に触れながら，多面的な要求にみあって，最後まで人間らしさを損なわずに行うことが，肝要である。そのためには，何よりもケアワーカーの倫理性，科学性，技能そしてそれらの統合された専門性が，欠くことのできないものである。

なお，以上の結論は，社会福祉・社会保障研連の委員会（月1回を原則）で，現場の実践を参考にし，約2年間の検討及び昨年12月9日に行った公開シンポジウム「高齢者問題と福祉サービス」（参加者約200名）の討論を基にまとめたものである。

日本学術会議第14期会員の選出に係る学術研究団体の登録について

日本学術会議会員の選出に係わって，「会員の候補者」を選定し，その推薦に当たる「推薦人」を指名し，届け出ることを希望する学術研究団体は，期ごとに日本学術会議に「登録」をする必要があります。

（従って，第13期における登録学術研究団体も，第14期会員の推薦のための登録学術研究団体となるためには，改めて第14期の「登録」が必要です。）

第14期会員の推薦のための登録学術研究団体となるためには，所定の様式による「学術研究団体登録申請書」を，**昭和62年6月30日までに日本学術会議会員推薦管理会に到達するように提出しなければなりません。**

「学術研究団体登録申請書」は，所定の様式と用紙がありますので，日本学術会議会員推薦管理会に請求してください。無料で送付します。

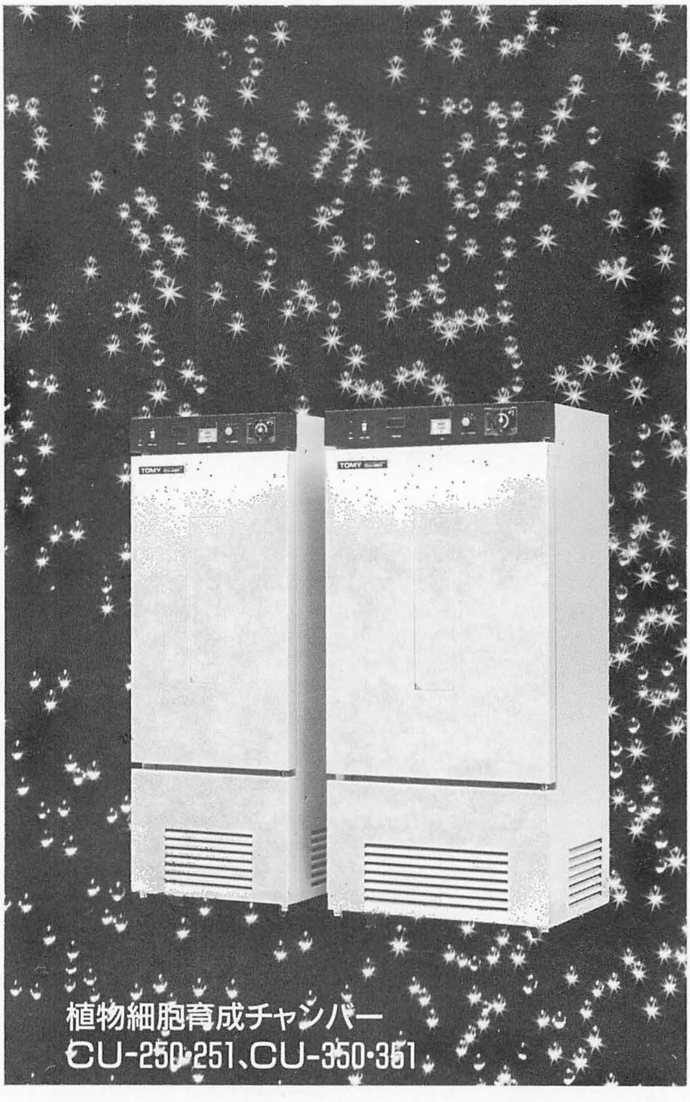
多数の学術研究団体の御協力により，「日本学術会議だより」を掲載していただくことができ，ありがとうございます。

なお，御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106　港区六本木7―22―34
日本学術会議広報委員会
（日本学術会議事務局庶務課）
電話　03（403）6291

TOMY

植物細胞育成チャンバー



今、バイオの時代を迎えて——

高照度、高精度温度制御。

殺菌灯とフィルター使用でクリーンな空気が循環。

昼夜の環境を確実に制御できるフルカバードタイプ。

●5面からの強力照射（植物育成用蛍光灯の使用も可能）。

●除菌装置付き、空気循環サイクル。

●庫内温度の異常上昇、下降を防止する安全機構。

●プログラム運転が可能な CU−251・351

●最大照度　庫内容量
23,000lx　250ℓ　CU−250・251
18,200lx　350ℓ　CU−350・351

●使用温度範囲
+4〜+50℃

株式会社・トミー精工
本社　03・976・3111
札幌　011・742・8880
（松本電機製作所内）
筑波　02975・6・0811
大阪　06・305・3333
福岡　092・641・8451
（新興精機内）

新　刊

自然の中の藻類の「生きている姿」を知るために

藻類の生態

秋山 優・有賀祐勝
坂本 充・横浜康継 共編

A5判　640頁
定価12800円(〒400円)

1　水界生態系における藻類の役割－有賀祐勝＊2　水界環境と藻類の生理－藤田善彦＊3　藻類の生活圏－秋山優＊4　海洋植物プランクトンの生産生態－有賀祐勝＊5　湖沼における植物プランクトンの生産と動態－坂本充＊6　自然界における藻類の窒素代謝－和田英太郎＊7　植物プランクトンの異常増殖－飯塚昭二＊8　海藻の分布と環境要因－横浜康継＊9　河川底生藻類の生態－小林弘＊10　汽水域の藻類の生態－大野正夫＊11　土壌藻類の生態－秋山優＊12　海氷中の藻類の生態－星合孝男＊13　藻類と水界動物の相互作用－成田哲也＊14　藻のバソジーン－山本鎔子＊15　藻類の細胞外代謝生産物とその生態的役割－大和田紘一＊16　藻類の生活史と生態－中原紘之＊17　藻類群集の構造と多様性－宝月欣二　　各章末に掲載の多数の文献は読者にとって貴重な資料となろう。

シートでみる種の同定・分類

淡水藻類写真集

Photomicrographs of the Fresh-water Algae

山岸高旺・秋山優編集
B5判・各100シート・ルーズリーフ式
第1巻・第2巻　発売中　定価4000円
第3巻・第4巻　　　　　定価5000円　〒350
第5巻(10月刊)　　　　　以下継続

生物学史展望

井上清恒著　五千年にわたる生物学の流れを追い、各時代の特質を浮彫にする。分子の世界にまで進んだ生物学の立場を考えるために好適。定価4800円

回想のモーリッシュ

―ある自然科学者の人間像―

渋谷　章著　日本の植物学界に大きな足跡を残した自然科学者の生涯をたどる労作。　定価1800円

南の動物誌

―熱帯森林に生きる―

渡辺弘之著　熱帯森林を専攻する著者が，熱帯地域の動植物の生活を写真を中心に語る。定価1300円

世界の珍草奇木

―植物に見る生命の神秘―

川崎　勉著　自然界の重要な仲間植物群，強い生命力と環境への適応力を感激の筆で語る。定価1300円

近　刊

河川の珪藻

B5判

小林　弘著

日本淡水藻図鑑

廣瀬弘幸・山岸高旺編　日本ではじめて創られた本格的な図鑑。淡水藻類の研究者や水に関係する方々にとっては貴重な文献である。定価36,000円

藻類学総説

廣瀬弘幸著　藻類の分類と形態を重点に置いて，克明な図により丁寧に解説する。　定価10000円

植物組織学

猪野俊平著　植物組織学の定義・内容・発達史から研究方法を幅広く詳述した唯一の書。定価15000円

高地植物学

柴田　治著　植物の環境適応について長年研究した著者の成果をまとめた。　定価5800円

山歩きアラカルト

―自然の探索ノート―

柴田　治著　山野をたのしく歩くための心得帳。とくに山の医学は知っていて便利。　定価1300円

内田老鶴圃
東京・文京区大塚3-34-3／Tel 03-945-6781

海藻を総括的に論じた待望の書!!

海藻資源養殖学

徳田　廣（東京大学農学部）　大野　正夫（高知大学農学部）　小河　久朗（東北大学農学部）著

B5判　上製　口絵4頁
本文354頁　付・用語集
定価5,500円（送350円）

海藻の資源や養殖について初めて総括的に取揚げた待望の書。ノリを始めとする個々の海藻養殖の現状と将来展望から、藻場造成、利用法、海外での養殖、新しい海藻の養殖法、新品種形成の現状まで、実に幅広い観点から論じ尽した海藻入門の決定版。研究者・学生・養殖業者の熱い要望に応えて遂に刊行!!

主要目次

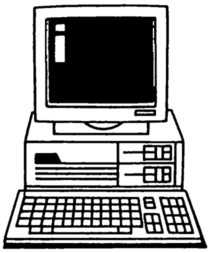
Ⅰ.地球生態系と海藻　Ⅱ.海藻の生育環境　Ⅲ.海藻の利用　Ⅳ.世界の海藻資源と生産量　Ⅴ.現在の海藻養殖　Ⅳ.藻場造成　Ⅶ.海外の海藻養殖の現状　Ⅷ.海藻養殖の将来と展望

〒102 東京都千代田区飯田橋4－6－5富士ビル
☎販売03-262-3582　振替／東京4-2758、6-80496
㈱緑書房

最先端と素敵な出合

データベースでダイナミックプリンティングコミュニケーション

富士通 OASYS
NEC PC-9801
入力装置
ドッド文字



富士通 9450シリーズ　NEC PC-9801

写研
美しい文字

生まれかわるデータベース
会員管理・名簿管理・調査票発送・集計・印刷・請求・販売促進・検索

CコーポレイトIアイデンティティで企業発展に貢献する――

日本印刷出版株式会社

■本　社　〒553 大阪市福島区吉野1丁目2番7号／TEL 06-441-6594(代)
■電算室　〒553 大阪市福島区吉野1丁目3番18号

付着生物研究法
―種類査定・調査法―

付着生物研究会編

A5判・上製・カバー装・158ページ・定価2000円

付着動物の多くは海洋構造物に付着して，その機能を低下させる汚損動物とみなされるが，一方それが存在することはその場が健全な環境であることも指標する．海洋開発が環境との調和を保って行われている限り，構造物には必ず付着生物が着生する．これを学問的あるいは産業的，いずれの視点より取り扱うにしても種類の査定はその第１歩であろう．わが国沿岸域に出現する主要な海産付着動物を取り上げ，その分類体系・形態の特徴を概説し，さらに汚損生物として重要な種の特徴と査定法を解説．またその生態調査の方法である海中構造物・試験板浸漬調査についての手法を紹介する．

①海　綿　類（星野孝治）　②ヒドロ虫類（山田真弓）　③管棲多毛類（今島　実）　④苔　虫　類（馬渡静夫・馬渡峻輔）　⑤フジツボ類（山口寿之）　⑥ホ　ヤ　類（西川輝昭）　⑦付着動物の調査法（梶原　武）

有毒プランクトン

岡市友利・安元　健他著

まひ性貝毒・下痢性貝毒・シガテラ毒などプランクトン→魚介類→ヒト　といった食物連鎖による食中毒が多発し，大きな社会問題になっている．この毒性プランクトン発生・作用機構・毒成分を，食品衛生関係者による対策を考える．（A５判・136Ｐ・定価1600円）

貝毒プランクトン

福代康夫編

ムラサキガイ・カキ・ホタテ・アサリ・コタマガイ等による食中毒事件は例年70件以上にも及び，その対策が急がれる．この貝毒プランクトンの生物学と生態を中心に，広くわが国各水域での毒化現象を追求する研究者によるデータを持寄る．（A５判・126Ｐ・定価1600円）

ヒ素 化学・代謝・毒性

石西　伸・岡部史郎・菊池武昭 編

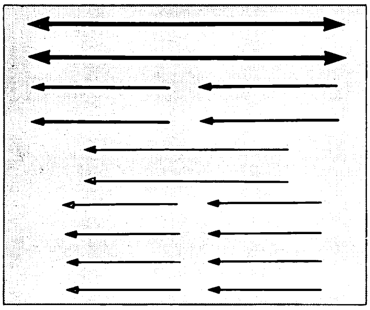
粉ミルク事件としてヒ素中毒の記憶は生々しい．本書はヒ素の生体影響・生体内動態を医学の立場より，また海草類も多食する日本人にとっての摂取危惧，エレクトロニクス等の利用面，ヒ素分析技法を多方面よりヒ素の実像を探る注目の新書．（A５判・158Ｐ・定価2500円）

〒160 東京都新宿区三栄町８／電話 03-359-7371　**恒星社厚生閣**

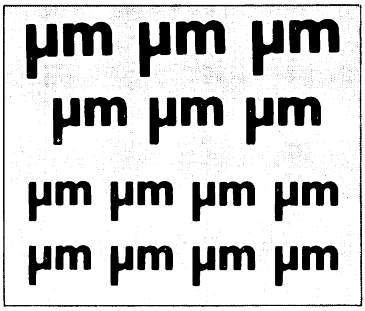
新製品ご案内!!

レタリングシート（ブラック アンド ホワイト）

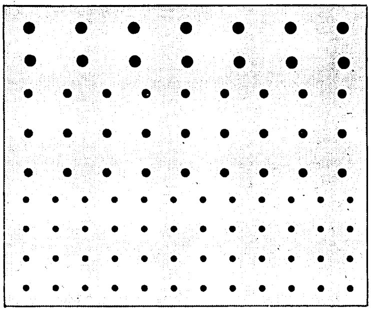
EMI NO.82014



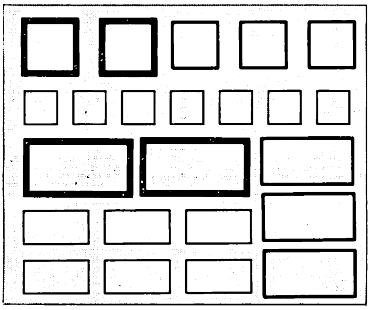
EMI NO.82016



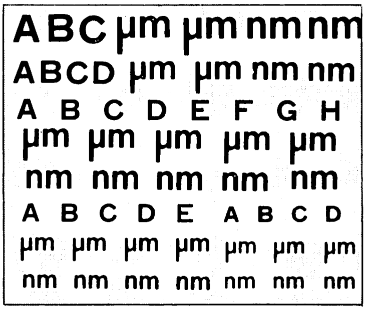
EMI NO.86626



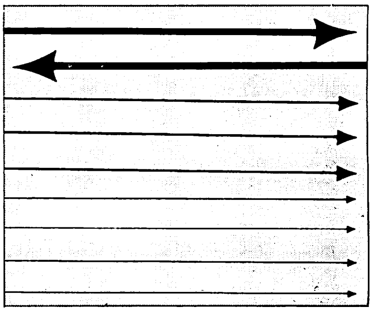
EMI NO.86627



EMI NO.86902



EMI NO.86916



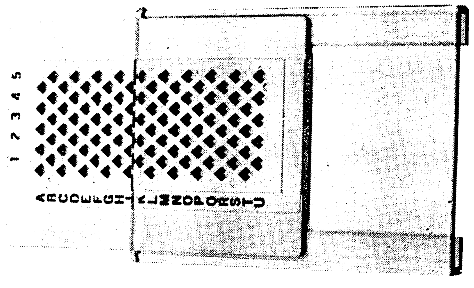
※レタリングシートの総合カタログが出来ました。下記の住所へカタログをご請求下さい。

西独製 精密ピンセット

①時計ピンセット　③5型変形ピンセット
②3Cピンセット　④SS型ピンセット

各1本：￥2,200

EMグリッドボックス



1個：￥1,800　10個：￥15,000

EM資材直販センター

〒274 千葉県船橋市三山5-6-1 TEL.0474(75)5783
東京営業所：TEL.03(988)9906

学 会 出 版 物

下記の出版物をご希望の方に頒布致しますので，学会事務局までお申し込み下さい。（価格は送料を含む）

1.　「藻類」バックナンバー　価格，会員各号1,750円，非会員各号3,000円，30巻4号（創立30周年記念増大号，1—30巻索引付）のみ会員5,000円，非会員7,000円，欠号：1—2号，4巻1．3号，5巻1—2号，6—9巻全号。

2.　「藻類」索引　1—10巻，価格，会員1,500円，非会員2,000円，11—20巻，会員2,000円，非会員3,000円，創立30周年記念「藻類」索引，1—30巻，会員3,000円，非会員4,000円。

3.　山田幸男先生追悼号　藻類25巻増補．1977．A5版，xxviii+418頁．山田先生の遺影・経歴・業績一覧・追悼文及び内外の藻類学者より寄稿された論文50編（英文26，和文24）を掲載．価格7,000円。

4.　日米科学セミナー記録　Contributions to the systematics of the benthic marine algae of the North Pacific. I. A. Abbott・黒木宗尚共編。1972．B5版，xiv+280頁，6図版．昭和46年8月に札幌で開催された北太平洋産海藻に関する日米科学セミナーの記録で，20編の研究報告（英文）を掲載。価格4,000円。

5.　北海道周辺のコンブ類と最近の増養殖学的研究　1977．B5版，65頁。昭和49年9月に札幌で行なわれた日本藻類学会主催「コンブに関する講演会」の記録。4論文と討論の要旨。価格1,000円。

Publications of the Society

Inquiries concerning copies of the following publications should be sent to the Japanese Society of Phycology, c/o **Division of Tropical Agriculture, Faculty of Agriculture, Kyoto University, Kitashirakawa-oiwakecho, Sakyo-ku, Kyoto, 606 Japan.**

1. Back numbers of the Japanese Journal of Phycology (Vols. 1–28, Bulletin of Japanese Society of Phycology). Price, 2,000 Yen per issue for member, or 3,500 Yen per issue for non member, price of Vol. 30, No. 4 (30th Anniversary Issue), with cumulative index (Vols. 1–30), 6,000 Yen for member, or 7,500 Yen for non member. Lack: Vol. 1, Nos. 1–2; Vol. 4, Nos. 1, 3; Vol. 5, Nos. 1–2; Vol. 6–Vol. 9, Nos. 1–3 (incl. postage, surface mail).

2. Index of the Bulletin of Japanese Society of Phycology. Vol. 1 (1953)–Vol. 10 (1962) Price 2,000 Yen for member, 2,500 Yen for non member, Vol. 11 (1963)–Vol. 20 (1972). Price 3,000 Yen for member, 4,000 Yen for non member. Vol. 1 (1953)-Vol. 30 (1982). Price 4,000 Yen for member, 5,000 Yen for non member (incl. postage, surface mail).

3. A Memorial Issue Honouring the late Professor Yukio Yamada (Supplement to Volume 25, the Bulletin of Japanese Society of Phycology). 1977. xxviii+418 pages. This issue includes 50 articles (26 in English, 24 in Japanese with English summary) on phycology, with photographies and list of publications of the late Professor Yukio YAMADA. ¥ 8,500 (incl. postaeg, surface mail).

4. Contributions to the Systematics of the Benthic Marine Algae of the North Pacific. Edited by I.A. ABBOTT and M. KUROGI, 1972. xiv+280 pages, 6 plates. Twenty papers followed by discussions are included, which were presented in the U.S.-Japan Seminar on the North Pacific benthic marine algae, held in Sapporo, Japan, August 13–16, 1971. ¥ 5,000 (incl. postage, surface mail).

5. Recent Studies on the Cultivation of *Laminaria* in Hokkaido (in Japanese). 1977. 65 pages. Four papers followed by discussions are included, which were presented in a symposium on *Laminaria*, sponsored by the Society, held in Sapporo, September 1974. ¥ 1,200 (incl. postage, surface mail).

昭和62年6月10日　印刷
昭和62年6月20日　発行

©1987 Japanese Society of Phycology

禁　転　載
不　許　複　製

Printed by Nippon Insatsu Shuppan Co., Ltd.

編集兼発行者　坪　由　宏
〒657　神戸市灘区鶴甲 1-2-1
神戸大学教養部生物学教室内
Tel. 078-881-1212

印　刷　所　日本印刷出版株式会社
〒553　大阪市福島区吉野 1-2-7

発　行　所　日　本　藻　類　学　会
〒606　京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部熱帯農学専攻内
Tel. 075-751-2111
（内線　6355，6357）

本誌の出版費の一部は文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」による。

Publication of The Japanese Journal of Phycology has been supported in part by a Grant-in-Aid for Publication of Scientific Research Result from the Ministry of Education, Science and Culture, Japan.

第35巻　第2号　昭和62年6月20日

藻　類

目　次

Richard E. Norris：アフリカ新産のスジナシグサ *Lenormandiopsis* 属（紅藻・フジマツモ科）の新種 *L. nozawae* sp. nov. の記載，及び他種との比較 ……………………（英文） 81

Herbert Vandermeulen and Robert E. DeWreede：ブリティシュ・コロンビアにおける *Colpomenia peregrina* 個体群の解析：環境及び主要基層との関係 ……………………（英文） 91

熊野　茂・Lawrence M. Liao：フィリッピン，ノノック島のカワモヅク属，コントルタ節（紅藻・ウミゾウメン目）の1新種 ……………………（英文） 99

Orlando Necchi Júnior：チスジノリ属（紅藻・チスジノリ科）の有性生殖 ……………………（英文） 106

奥田一男・水田　俊：タマジュズモ細胞の形の変化に伴う小胞の細胞壁への蓄積 ……………………（英文） 113

三上日出夫：クシノハウスベニとスジベニハノリ（紅藻・コノハノリ科）について ……………………124

ノート

川口栄男・増田道夫：紅藻 *Chondrus punctatus* Suringar について ……………………（英文） 121

総　説

水田　俊：藻類におけるセルロース性細胞壁　Ⅱ．ミクロフィブリルの形成と配向変換の調節 ……………………130

訃　報 ……………………144

新刊紹介 ……………………90，145

学会録事 ……………………146

学会会則 ……………………151

投稿案内 ……………………152

日　本　藻　類　学　会